

## 第2問

次の文章は、加能作次郎「羽織と時計」(一九一八年発表)の一節である。「私」と同じ出版社で働くW君は、妻子と従妹と暮らしていたが生活は苦しかった。そのW君が病で休職している期間、「私」は何度か彼を訪れ、同僚から集めた見舞金を届けたことがある。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

春になって、陽気がだんだん暖かになると、W君の病気も次第に快くなつて、五月の末には、再び出勤することが出来るようになった。

『君の家の紋(注1)は何かね?』

彼が久し振りに出勤した最初の日、W君は突然私に尋ねた。私は不審に思いながら答えた。

『(注2)円まるに横モッコです。平凡なありふれた紋です。何ですか?』

『いや、実はね。僕も長い間休んで居て、君に少すくなな世話になつたから、ほんの

10 お礼の印に羽二重(注3)を一反(注4)お上げしようと思っ  
ているんだが、同じことなら羽織(注5)にでも  
なるように紋を抜いた方がよいと思っ  
てね。どうだね、其方(注5)がよかろうね。』とW君は  
言った。

W君の郷里は羽二重の産地で、彼の親類に織元(注5)があるので、そこから安く、実費で  
分けて貰うので、外にも序(注5)があるから、そこから直接に京都へ染めにやることにして  
あるとのごとであつた。

15 『染は京都でなくちゃ駄目だからね。』とW君は独りで首肯(注5)して、『じゃ早速言つてや  
らう。』

私は辞退する(ア)術(注5)もなかつた。

一ヶ月あまり経つて、染め上つて来た。W君は自分でそれを持って私の下宿を訪れ  
て呉れた。私は早速W君と連れだつて、呉服屋へ行つて裏地を買つて羽織に縫つて  
貰つた。

20 貧乏な私は其時まで礼服というものを一枚も持たなかつた。羽二重の紋付の羽織と  
いうものを、その時始めて着たのであるが、今でもそれが私の持物(注5)の中で最も貴重な

もの一つとなって居る。

『ほんとうにいい羽織ですと、あなたの様な貧乏人が、こんな羽織をもつて居なさるのが不思議な位ですわね。』

25 妻は、私とその羽織を着る機会のある毎毎にそう言った。私はW君から貰ったのだと

いうことを、妙な羽目からついイ言いはぐれて了しまって、今だに妻に打ち明けてないのであった。妻が私が結婚の折に特に拵しんじゆえたものと信じて居るのだ。下に着る着物でも袴はかまでも、その羽織とは全く不調和な粗末なものばかりしか私は持つて居ないので、

『よくそれでも羽織だけ飛び離れていいものをお拵しんじゆえになりましたわね。』と妻は言うのであった。

『そりゃ礼服だからな。これ一枚あれば下にどんなものを着て居ても、兎とに角かく礼服として何処どこへでも出られるからな。』私は **A** 撥はたぐられるような思おもいをしながら、そんなことを言いって誤魔化ごまかして居た。

(注6)

『これで袴はかまだけ注6仙台平せんだいひらか何かのそ揃そろつのですけれどね。どどうにかして袴はかまだけ

35 いいのをお持えなさいよ。これじゃ羽織が泣きますわ。こんなぼとぼとしたセルの袴(注7)

じゃ、折角せつかくのいい羽織がちつとも引き立たないじゃありませんか。』

妻はいかにも惜しそうにそう言い言いました。

私もそうは思わないではないが、今だにその余裕がないのであった。私はこの羽織を着る毎にW君のことを思い出さずに居なかつた。

40 その後、社に改革があつて、私が雑誌を一人でやることになり、W君は書籍の出版の方に廻まわることになつた。そして翌年の春、私は他にいい口があつたので、その方へ転ずることになつた。

W君は私の将来を祝し、送別会をする代りだといつて、自ら奔走して社の同人(注8)達から二十円ばかり醸金きよきんをして、私に記念品を贈ることにして呉れた。私は時計を持つて居なかつたので、自分から望んで懐中時計を買つて貰つた。

『贈××君。××社同人。』

こつ銀側の蓋の裏に小さく刻まれてあつた。

この処置について、社の同人の中には、内々不平を抱いたものもあつたそうだ。まだ二年足らずしか居ないものに、記念品を贈るなどという事は曾て例のないこと  
50 で、これはW君が、自分の病気の際に私が奔走して見舞金を贈ったので、その時の私の厚意に酬いようとする個人的感情から企てたことだといってW君を非難するものもあつたそうだ。また中には、

『あれはW君が自分が罷める時にも、そんな風なことをして貰いたいからだよ。』と卑しい邪推をして皮肉を言ったものもあつたそうだ。

55 私は後でそんなことを耳にして非常に不快を感じた。そしてW君に対して気の毒でならなかつた。そういう非難を受けてまでも(注10)それはW君自身予想しなかつたことであらうが私の為に奔走して呉れたW君の厚い情誼を思いやると、私は涙ぐましいほど感謝の念に打たれるのであつた。それと同時に、その一種の恩恵に対して、常に或る重い圧迫を感じざるを得なかつた。

60 羽織と時計——。私の身についたものの中で最も高価なものが、二つともW君から

贈られたものだ。この意識が、今でも私の心に、感謝の念と共に、**B** 何だかやましいような気恥きはずかしいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情を起おこさせるのである。

65 ××社を出てから以後、私は一度もW君と会わなかった。W君は、その後一年あまりして、病気が再発して、遂ついに社を辞し、いくらかの金を融通して来て、電車通りに

小さなパン菓子屋を始めたこと、自分は寝たきりで、店は主に従妹が支配して居て、それでやっと生活して居るといふことなどを、私は或る日途中で××社の人に遇あった時に聞いた。私は××社を辞した後、或る文学雑誌の編輯へんしゅうに携たずさわって、文壇の方と接触する様になり、交友の範囲もおのずから違つて行き、仕事も忙しかったので、一度見舞みまい旁々かたがた訪たもとねばならぬと思ひながら、自然と遠ざかつて了つた。その中うち私も結婚

70 をしたり、子が出来たりして、境遇も次第に前と異ことなつて来て、一層(ウ)足が遠くなつた。偶々たまたま思い出しても、久しく無沙汰をして居ただけそれだけ、そしてそれに対して一種の自責を感ずれば感ずるほど、妙に改まった気持きもちになつて、つい億劫おじくじくになるのであつた。

75 羽織と時計——併し<sup>しか</sup>本当を言えば、この二つが、W君と私とを遠ざけたようなもの

であつた。これがなかつたなら、私はもつと素直な自由な気持になつて、時々W君を訪れることが出来たであらうと、今になつて思われる。何故<sup>なぜ</sup>というに、私はこの二個の物品を持つて居るので、常にW君から恩惠的債務を負つて居るように感ぜられたからである。この債務に対する自意識は、私をして不思議にW君の家の敷居を高く思わせた。而も<sup>しか</sup>不思議なことに、**C** 私はW君よりも、彼の妻君の眼を恐れた。私が時計

80 を帯にはさんで行くとする、『あの時計は、良人<sup>(注11)</sup>が世話して進<sup>あ</sup>げたのだ。』斯<sup>こ</sup>う妻君の眼が言う。私が羽織を着て行く、『あああの羽織は、良人が進<sup>あ</sup>げたのだ。』斯<sup>こ</sup>う妻君の眼が言う。もし二つとも身につけて行かないならば、『あの人は羽織や時計をどうしただらう。』斯<sup>こ</sup>う妻君の眼が言うように空想されるのであつた。どつしてそんな考<sup>かんがえ</sup>が起<sup>おこ</sup>るのか分<sup>わか</sup>らない。或<sup>あるい</sup>は私自身の中に、そついう卑しい邪推深い性情がある為である。が、いつでもW君を訪れようと思いつく毎に、妙にその厭<sup>いや</sup>な考が私を引き止めるのであつた。そればかりではない、こつして無沙汰を続ければ続けるほど、私はW君

の妻君に対して更に恐れを抱くのであった。

90 『〇〇さんて方は随分薄情な方ね、あれきり一度も来なさらない。こうして貴郎あなたが病気で寝て居らっしゃるのを知らないんでしょうか、見舞に一度も来て下さらない。』

斯う彼女が彼女の良人おつとむかに向って私を責めて居るのである。その言葉には、あんなに、羽織や時計などを進げたりして、こちらでは尽つくすだけのごとは尽してあるのに、という意味を、彼女は含めて居るのである。

95 そんなことを思うと逆とても行く気にはなれなかった。こちらから出て行って、妻君のそついう考をなくする様に努めるよりも、私は逃げようとした。私は何か偶然の機会機会で妻君なり従妹なりと、途中ででも遇わんことを願った。そつしたら、

『W君はお変かわりありませんか、相変かわらず元気で××社へ行つていらつしやいますか?』  
としらばくれて尋ねる、すると、疾とつに社をやめ、病気で寝て居ると、相手の人は答えるに違ちがいない。

100 『おやおや!—一寸ちつとも知りませんでした。それはいけませんね。どつどつよろしく言つて下さい。近ちかいうちに御見舞おに上りますから。』



こう言つて分れよう。そしてそれから二三日置いて、何か手土産を、そつだ、かなり立派なものを持って見舞に行こう、そつするとそれから後は、心易く往来出来るだろう——。

105 そんなことを思いながら、三年四年と月日が流れるように経つて行つた。今年の新

緑の頃、子供を連れて郊外へ散歩に行つた時に、**D** 私は少し遠廻りして、W君の家  
の前を通り、原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に餡パン  
を買寄せたが、実はその折陰ながら家の様子を窺い、うまく行けば、全く偶然の様  
に、妻君なり従妹なりに遇おうという微かな期待をもつて居たためであつた。私は電  
車の線路を挟んで向側の人道に立つて店の様子をそれとなく注視して居たが、出て

110 来た人は、妻君でも従妹でもなく、全く見知らぬ、下女の様な女だつた。(注12) 私は若しや  
家が間違つては居ないか、または代が變つてでも居るのではないかと、屋根看板をよ  
く注意して見たが、以前××社の人から聞いたと同じく、××堂W——とあつた。た  
しかにW君の店に相違なかつた。それ以来、私はまだ一度も其店の前を通つたことも  
115 なかつた。

(注)

1 紋——家、氏族のしるしとして定まっている図柄。

2 円に横モッコ——紋の図案の一つ。

3 羽二重——上質な絹織物。つやがあり、肌ざわりがいい。

4 一反——布類の長さの単位。長さ一〇メートル幅三六センチ以上が一反の規格で、成人一人分の着物となる。

5 紋を抜いた——「紋の図柄を染め抜いた」という意味。

6 仙台平——袴に用いる高級絹織物の一種。

7 セル——和服用の毛織物の一種。

8 同人——仲間。

9 醸金——何かをするために金銭を出し合ふこと。

10 情誼——人とつきあう上での人情や情愛。

11 良人——夫。

12 下女——雑事をさせるために雇った女性のこと。当時の呼称。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の

①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は **13** ～ **15**。

① 理由もなかった

(29ページ)  
② 手立てもなかった

(ア) 術もなかった

**13**  
③ 義理もなかった

④ 気持ちもなかった

⑤ はずもなかった

(30ページ)  
① 言う必要を感じないで

(イ) 言うのを忘れて

**14**  
② 言う機会を逃して

③ 言うのを忘れて

④ 言う気になれなくて

⑤ 言うべきでないと認めて

(33 ページ)

(ウ) 足が遠くなった

15

- ① 訪れることがなくなった
- ② 時間がかかるようになった
- ③ 会う理由がなくなった
- ④ 行き来が不便になった
- ⑤ 思い出さなくなった

問2 30ページの傍線部A「揶ぶられるような思」とあるが、それはどのような気持ち

か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解

答番号は

16。

- ① 自分たちの結婚に際して羽織を新調したと思い込んで発言している妻に対する、笑い出したいような気持ち。
- ② 上等な羽織を持っていることを自慢に思いつつ、妻に事実を知られた場合を想像して、不安になっている気持ち。
- ③ 妻に羽織をほめられたうれしさど、本当のことを告げていない後ろめたさとが入り混じった、落ち着かない気持ち。
- ④ 妻が自分の服装に関心を寄せてくれることをうれしく感じつつも、羽織だけほめることを物足りなく思う気持ち。
- ⑤ 羽織はW君からもらったものだど妻に打ち明けてみたい衝動と、自分を侮っている妻への不満どがせめぎ合う気持ち。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

問3 33ページの傍線部B「何だかやましいような気恥しいような、訳のわからぬ一

種の重苦しい感情」とあるが、それはどいついつことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① W君が手を尽くして贈ってくれた品物は、いずれも自分には到底釣り合わないほど立派なものに思え、自分を厚遇しようとするW君の熱意を過剰なものに感じてとまどっている。

② W君の見繕ってくれた羽織はもちろん、自ら希望した時計にも実はさしたる必要を感じていなかったのに、W君がその贈り物をするために評判を落としたことを、申し訳なくももったいなくも感じている。

③ W君が羽織を贈ってくれたことに味をしめ、続いて時計までも希望し、高価な品々をやすやすと手に入れてしまった欲の深さを恥じており、W君へ向けられた批判をそのまま自分にも向けられたものと受け取っている。

④ 立派な羽織と時計とによって一人前の体裁を取り繕うことができたものの、それらを自分の力では手に入れられなかったことを情けなく感じており、W君の厚意にも自分へ向けられた哀れみを感じ取っている。

⑤ 頼んだわけでもないのに自分のために奔走してくれるW君に対する周囲の批判を耳にするたびに、W君に対する申し訳なさを感じたが、同時にその厚意には見返りを期待する底意をも察知している。



問4 34ページの傍線部C「私はW君よりも、彼の妻君の眼を恐れた」とあるが、「私」

が「妻君の眼」を気にするのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 「私」に厚意をもって接してくれたW君が退社後に寝たきりで生活苦に陥っていることを考えると、見舞に駆けつけなくてはいけないと思う一方で、「私」の転職後はW君と久しく疎遠になってしまい、その間看病を続けた妻君に自分の冷たさを責められるのではないかと悩んでいるから。

② W君が退社した後慣れないパン菓子屋を始めるほど家計が苦しくなったことを知り、「私」が彼の恩義に酬いる番だと思う一方で、転職後にさほど家計も潤わずW君を経済的に助けられないことを考えると、W君を家庭で支える妻君には申し訳ないことをしていると感じているから。

③ 退職後に病で苦勞しているW君のことを思うと、「私」に対するW君の恩義は一生忘れてはいけないと思う一方で、忙しい日常生活にかまけてW君のことをつい忘れてしまつふがいなさを感じたまま見舞に出かけると、妻君に偽善的な態度を指摘されるのではないかという怖さを感じているから。

④ 自分を友人として信頼し苦しい状況にあつて頼りにもしているだろうW君のことを想像すると、見舞に行きたいという気持ちが募る一方で、かつてW君の示した厚意に酬いていないことを内心やましく思わざるを得ず、妻君の前では卑屈にへりくだらねばならないことを疎ましくも感じているから。

⑤ W君が「私」を立派な人間と評価してくれたことに感謝の気持ちを持っているため、W君の窮状を救いたいという思いが募る一方で、自分だけが幸せになつているのにW君を訪れなかつたことを反省すればするほど、苦勞する妻君には顔を合わせられないと悩んでいるから。

問5 36ページの傍線部D「私は少し遠廻りして、W君の家の前を通り、原っぱで子

供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に餡パンを買わせた」とあるが、この「私」の行動の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19。

① W君の家族に対する罪悪感を募らせるあまり、自分たち家族の暮らし向きが好転したさまを見せることがためらわれて、かつてのような質素な生活を演出しようとする振る舞いに及んでいる。

② W君と疎遠になってしまった後悔にさいなまれてはいるものの、それを妻に率直に打ち明け相談することも今更できず、逆にその悩みを悟られまいとして妻にまで虚勢を張るはめになっている。

③ 家族を犠牲にしてまで自分を厚遇してくれたW君に酬いるためのふさわしい方法がわからず、せめて店で買い物をする事によって、かつての厚意に少しでも応えることができると考えている。

④ W君の家族との間柄がこじれてしまったことが気がかりでならず、どうにかしてその誤解を解こうとして稚拙な振る舞いに及ぶばかりか、身勝手な思いに事情を知らない自分の家族まで付き合わせている。

⑤ 偶然を装わなければW君と会えないとまで思っていたが、これまで事情を誤魔化してきたために、今更妻に本当のことを打ち明けることもできず、回りくどいやり方で様子を窺う機会を作ろうとしている。

問6 次に示す【資料】は、この文章(加能作次郎「羽織と時計」)が発表された当時、新

聞紙上に掲載された批評(評者は宮島新三郎、原文の仮名遣いを改めてある)の一部である。これを踏まえた上で、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

今までの氏は生活の種々相を様々な方面から多角的に描破<sup>(注1)</sup>して、其処<sup>そこ</sup>から或るものを浮き上<sup>あが</sup>らせようとした点があったし、又そうすることに依<sup>よ</sup>って作品の効果を強大にするという長所を示していたように思う。見た儘<sup>まま</sup>、有りの儘を刻明に描写する——其処に氏の有する大きな強味がある。由来<sup>(注2)</sup>氏はライフの一点だけを覘<sup>ねら</sup>って作をするというような所謂<sup>いわゆる</sup>『小話<sup>こばなし</sup>』作家の面影は有<sup>も</sup>っていなかった。

それが『羽織と時計』になると、作者が本当の泣き笑いの悲痛な人生を描こうとしたものか、それとも単に羽織と時計に伴う思い出を中心にして、ある

一つの興味ある覘いを、否一つのおちを物語ってでもやるうとしたのか分らない程謂う所の小話臭味の多過ぎた嫌いがある。若し此作品から小話臭味を取去ったら、即ち羽織と時計とに作者が関心し過ぎなかつたら、そして飽くまでも『私』の見たW君の生活、W君の病氣、それに伴う陰鬱な、悲惨な境遇を如実に描いたなら、一層感銘の深い作品になつたらうと思われる。羽織と

(注3)

時計とに執し過ぎたことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはなつたが、作品の効果を増す力にはなつて居ない。私は寧ろ忠実なる生活の再現者としての加能氏に多くの尊敬を払っている。

宮島新三郎「師走文壇の一瞥」(『時事新報』一九一八年二月七日)

(注) 1 描破——あまさず描きしへんこと。

2 由来——元来、もともと。

3 執し過ぎた——「執着し過ぎた」という意味。

(i) 【資料】の49ページの二重傍線部に「羽織と時計とに執し過ぎたことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはなかったが、作品の効果を増す力にはなっていない。」とあるが、それはどのようなことか。評者の意見の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 多くの挿話からW君の姿を浮かび上がらせようとして、W君の描き方に予期せぬぶれが生じている。
- ② 実際の出来事を忠実に再現しようとして意識しすぎた結果、W君の悲痛な思いに寄り添えていない。
- ③ 強い印象を残した思い出の品への愛着が強かったために、W君の一面だけを取り上げ美化している。
- ④ 挿話の巧みなまとまりにこだわったため、W君の生活や境遇の描き方が断片的なものになっている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。



(ii) 【資料】の評者が着目する「羽織と時計」は、表題に用いられるほかに、「羽織

と時計——」という表現として本文中にも用いられている(60行目(32ページ)、75行目(34ページ)。この繰り返しに注目し、評者とは異なる見解を提示した内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

21。

① 「羽織と時計——」という表現がそれぞれ異なる状況において自問自答のように繰り返されることで、かつてのようにはW君を信頼できなくなっていく「私」の動揺が描かれることを重視すべきだ。

② 複雑な人間関係に耐えられず生活の破綻を招いてしまったW君のつたなさだが、「羽織と時計——」という余韻を含んだ表現で哀惜の思いをこめて回顧されていることを重視すべきだ。

③ 「私」の境遇の変化にかかわらず繰り返し用いられる「羽織と時計——」という表現が、好意をもって接していた「私」に必死で応えようとするW君の思いの純粹さを想起させることを重視すべきだ。

④ 「羽織と時計——」という表現の繰り返しによって、W君の厚意が皮肉にも自分をかえって遠ざけることになった経緯について、「私」が切ない心中を吐露していることを重視すべきだ。